



## 幕末・明治期の日本で活躍したフランス人 (1) (レオン・ロッシュ)

神戸大学 経済経営研究所  
教授 青山 利勝

幕末から明治にかけての日仏交流史を紐解くとき、どうしてもレオン・ロッシュという外交官の特異性に目が行ってしまふ。レオン・ロッシュは幕末の歴史に名を残した第2代フランス公使である。

江戸幕府は欧米列強に対して国の門戸を開放することを宣言し、鎖国政策を捨て開国に踏み切った。それまで香港や上海を根城として貿易を行っていたヨーロッパの商人達は、日本との貿易の窓口となる横浜に移動し、次々と支社を開設した。イギリスはフランスに先駆けて日本との貿易を進めていた。フランスがイギリスに追いつくためには、横浜に十分な資金を供給できる銀行や大規模な取引ができる商社を作る必要があった。こうしたフランスの明確な通商政策を推進するために極東の日本に派遣されたのがレオン・ロッシュ第2代フランス公使である。

時は1864年、横浜にはヨーロッパで珍重される上質な生糸を求めてフランス商人が徐々に集まりだしていた時期である。レオン・ロッシュはフランスの通商政策を有利に進めるため、江戸幕府に接近した。これに対してイギリスのハリー・パークス公使はイギリス商人を通じて薩摩藩に接近し討幕運動に荷担することになる。江戸幕府は結局倒れることになってしまったが、レオン・ロッシュの残した足跡は後に明治初期の殖産興業を支える礎となるのである。レオン・ロッシュは幕末動乱期の情勢を見抜けなかった外交官としてイギリスのハリー・パークス公使の先見性と比較されることがある。しかしながら、幕末の情勢は混沌としており、たとえ大政奉還となっても幕府の勢力が温存される余地は残されていた。幕府は経済的な基盤となる領地を多く所有していたからである。それが1867年12月、朝廷（岩倉具視一派）と薩摩・長州藩らの画策によって、王政復古の詔勅が発布された結果、徳川慶喜の官位辞去と領土返還の勅旨が下されたのである。

当時こうした劇的な政治情勢の展開を予測できた外国高官は少なかったはずである。否皆無であったにちがいない。したがって、レオン・ロッシュの情勢分析が甘かったというのは結果論に過ぎない面もある。むしろ、わたしはレオン・ロッシュが橋渡しとなって幕末にフランスから移転された近代技術こそ、明治政府が近代国家を建設する基礎の一部となったことが重要な足跡であると考えている。その特筆すべき近代技術とは、鋼鉄船の造船技術と絹織物の生産技術である。

レオン・ロッシュが幕末にフランス中部の地方都市であったリヨンやサンテティエンヌから招いた製鉄技術者たちは、横須賀に幕府の海軍造船所を建設した。また、同時期にリ

ヨンから技術移転された製糸技術は、明治初期には富岡製糸工場の建設という形で結実している。したがって、1958年に日仏修好通商条約が締結されて以降、レオン・ロッシュを仲介役として幕末から明治初期にかけて日本とフランスの実質的な経済交流が始まったといえる。こうしたことからレオン・ロッシュという人物は、後述するように職業外交官ではなかったが、幕末の歴史に足跡を残すダイナミックな人物であったと考えられる。

では、何故にロッシュが幕末から明治にかけての動乱の日本で活躍することができたのか。その参考となる彼の経歴を見てみるとそのユニークで興味深い人物像が浮き上がってくる。

レオン・ロッシュのダイナミックな行動力はアラビア世界の関わりの中から生まれている。ロッシュは1809年ローヌ・アルプ地方のグルノーブルの豪農の家に生まれた。グルノーブル大学法学部に入学するが、6ヶ月で退学し、父親の友人の貿易商を頼ってマルセイユに赴く。3年間のマルセイユでの生活で地中海貿易のノウハウを学んだものと思われる。地中海貿易の相手はアラビア商人であり、ロッシュはここでアラビア語の基礎を身につける。1832年には父親がアルジェリアで購入した農園を手伝うためにアルジェリアに渡っている。その後、32年間をアフリカ大陸で過ごすことになる。アルジェリアでは、太守（アラブの部族長）であったアブデル・カーデルとも親交を結び、娘のハディージャと恋に落ちている。これが契機となったのかイスラム教徒に改宗している。彼は優れた語学力を生かしてアラビア語に磨きをかけ、各地のアラビア語方言にも通じたロッシュはやがてアフリカ駐留のフランス軍通訳として活動することになる。折しもフランスはアルジェリアを武力制圧する野望をもって軍隊を増派しつつあったが、国際的には反仏抗戦の動きを未然に抑え穏健に植民地化を進める必要があった。そのためには、アラブの部族長たちとの篤い人脈を持つロッシュの力が必要であった。ロッシュもまたこの環境の中で自分の能力、経験を十二分に発揮することができた。

ロッシュはビュジョー將軍の命令でアルジェリアの太守アブデル・カーデルと反仏抗戦を止めさせるべく交渉に当たった。この際、彼の数種類のアラビア語を操る言語能力や現地の文化、習慣に精通した彼の立ち居振る舞いはアラブの首長たちから信頼を勝ち取る大きな武器となったようである。こうした彼の功績が評価されて、1845年にはモロッコのタンジール領事館員の職に任ぜられた。さらにはモロッコのフランス臨時代理大使も務めた。1949年、ロッシュはイタリアのトリエステの領事に任ぜられ、貿易実務を重ねる。3年後彼はリビアのトリポリ総領事に転任する。1855年にチュニジアのフランス大使館に赴任するが、アラブ世界の風俗、習慣に精通したロッシュは、アラブ人の衣装をまとい馬を巧みに操って朝野に人脈を広げていく。彼の外交官としての名声は高まるばかりだった。結局、ロッシュはチュニジアのチュニスに8年間滞在した後、1863年10月に江戸のフランス公使館の総領事兼代理公使に任命される。幕末の日本勤務は彼がこれまで歩んできた世界と全く異なるものだったはずである。

しかし、ロッシュは極東の日本で活躍できる能力をこれまでの海外勤務の経験から蓄積していた。彼の人物としての特異性、これまでのフランスの外交官と違った点は、当時フランス人としては珍しいイスラム教徒であったことや元々アラブ諸国を相手とした貿易商

人であったところにある。まず、彼の宗教的側面について見ると、当時の西欧世界には西欧諸国の植民地国家とアラブ諸国の非植民地国家を峻別する厳しい対立の図式があったことを考える必要がある。ロッシュの卓越したアラビア語の能力や豊富なアラブ世界の人脈を考える時、彼が単に植民地支配者の立場で物を考え行動する人物であったとは考えにくい。彼がアラブ世界で被植民地の人々の立場に立って作り上げた人脈と優れた人心掌握術とでもいふべき外交官としての資質が、幕末の日本で大いに役立つものであったのではないか。また、ロッシュのアラブ商人との貿易取引を通じた駆け引きの経験は、現実的な実利を追求する資質を育み、これがフランスの日本への通商政策を推進する原動力となりえたのではないか。

エドアール・ドルーアン・ド・リュイス外務大臣がロッシュを江戸のフランス公使館へ栄転させた理由は、チュニスでの彼の功績が大きく影響していたことは間違いない。しかし、その背景には当時のフランス経済の死活問題となっていた絹織物産業の再興という国家経済政策があったことは明らかである。1855年にヨーロッパ全土を席卷した蚕の病気は、リヨンの絹織物産業に壊滅的な打撃を与えていた。当時横浜に居留していたフランス商人の主な任務は、イギリスの寡占状態にあった貿易取引の内、生糸と蚕の輸入をフランスとの直接取引にすることであった。それまでの横浜港からヨーロッパへの輸出はイギリス商船によってロンドン経由で行われていた。実際に横浜とリヨンの直接貿易が実現するのは、1865年にフランス商船による上海と横浜航路が開通して以降である。このため、フランスの絹織物業界はリヨン商業会議所の後ろ盾の下で、ナポレオン3世の政府に圧力をかけることになる。こうした経済問題がフランスの日本に対する明確な通商政策をもったアプローチの必要性を認識させたのである。

こうしてロッシュが日本に派遣されたのは、彼の商人としての生い立ち、国策を推進する上での貿易実務の経験の豊富さが、日本でのフランスの通商政策を推進していく上で不可欠と判断されたからであろう。また、ロッシュがグルノーブル出身で、同じローヌ・アルプ地方の近接したリヨンの絹織物産業について知見を持っていたことも、彼の日本派遣の有力材料となったと考えられる。

ロッシュは、日本に出発する前にグルノーブルの家族のもとに滞在して、当時の養蚕業が直面している危機的状況をつぶさに調査している。さらに、リヨン商業会議所での講演で、リヨンの養蚕業を復活させるために病気に強い日本の蚕の卵と品質の高い生糸を供給すべく尽力すると述べている。このことからロッシュがフランスの通商政策の拡大という明確な意図をもって日本にやってきたことがわかる。かくして、1864年1月、ロッシュは単身戦艦ル・タンクレード号に乗ってマルセイユを出航し、4月に横浜に上陸し、明治維新までの4年半あまりを幕末動乱の中で江戸幕府の後ろ盾として八面六臂の活躍をするのである。(了)